

四足獣を描いた土器

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

当調査部は1978年に藤原宮の西辺部で、藤原宮第26次調査を行った。調査地は橿原市四分遺跡の一部に当たっていた。この調査では、多量の弥生土器とともに、四足獣を描いた土器片が⁽¹⁾出土して注目された。当初これは銅鐸形土製品の一部であろうと推定したが、その後、別の破片が接合して壺形土器の口縁部の可能性が高まったので、あらためてここに報告する。

出土地点は調査地の南西部で、弥生時代後期初めの土坑を覆い、後期弥生土器を多量に包含する黒褐色土層である。この破片は大型の壺形土器の口縁部と思われ、口縁部外面に粘土帯を貼付した痕跡がある。なお口縁端部の残りが僅かなので、口径や傾きは確定できない。胎土に石英・長石・クサリ礫を含み、色調は赤褐色を呈す。調整は内面がヨコナデ後ヘラミガキ、外面がナデを施した後、紋様や絵画を描く。時期は、弥生時代中期末か後期に属するとみられる。

内面の紋様・絵画は、①縦に格子紋を描き、②次に口縁端部に沿って、線鋸歯紋を描く。まず大振りの線鋸歯紋を描き始めるが、途中で上下に区画線をいれて小さくし直す。③さらにちょうど四足獣の胴のあたりを通る斜線をひいてから、④最後に四足獣を描く。胴体、足の順に描いてから、腹を描き直し一回り太らせる。外面には、複合線鋸歯紋をめぐらせる。

この土器を飾る紋様・絵画は、銅鐸のそれに基本的に共通する。これが土器であることが確定的になったことにより、土器と銅鐸との紋様の描き分けの実態を追求することが、今後ますます重要な課題となろう。

(深澤芳樹)

(1)「藤原宮第26次(宮西辺部)の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』9 1979年。

